さびしさは水底までにとほりけり

――安藤野雁詠一首断想――

遠藤　宏

さびしさは水底までにとほりけり

この、一種黙殺しがたい響きをもつ、と私には感じられる句を上三句に据えた一首の作者である安藤野雁という人間と向き合い始めたのは、もはや四半世紀前に遡る。二十五年ではない四半世紀ということばが思い浮かんだ時、「四半世紀」の「世紀」という語を念頭に浮かばせた自分自身に対して名状しがたい感傷がわけもなく湧き上がってくるのを抑制できなかった。そのころ私は立正大学に勤務していた。勤務校の分校が埼玉県熊谷にあって、本校と共に熊谷キャンパスにも通っていた。三島由起夫自決のニュースを興奮した面もちの職員から告げられたのもそのキャンパスにおいてであった。

某日、それまで私自身の中で分離して存在していた事柄が突忽として結合した。その結合とは、こうである。『万葉集新考』という未完の注釈書があり、その著者が安藤野雁という幕末の歌人・国学者であること、そして野雁は不羈の人で江戸市中を弊衣縄帯で徘徊し酒にまつわる逸話が多いこと、東海道筋を流浪して晩年を熊谷近くの青山で過ごし熊谷で没したこと、などといった断片的な知識が『万葉集新考』という私の専攻分野に直接関わる書が媒介となって頭の中にあった。そのことと、自分の勤務地とが別個に脳中に存在していたのだが、あの野雁終焉の地がこの熊谷なのだ、ということである。あさはかといえばあさはかなのだが、野雁という著者をその著作の遙か後方に私の内部では位置付けていて、著者については無関心だったということになる。

その、某日以後、地の利を十分に活用して野雁調査に傾倒した。野雁研究に関しては、渡辺刀水氏の『安藤野雁集』（上田泰文堂昭和九年）という越えがたい高峰があったのだが、新資料をかなり発見する幸運にも恵まれた。そのような中で、野雁の詠作には既に高い評価を得ているものも含めて、なかなか捨てがたい味わいの歌があると思うようになってきた。作者の実人生が次第に明かになってきたことによって、詠作を透かして作者が見えるようになってきたからではないかと思っている。標題の句をもつ一首も捨てがたいところのある作であると感じている。

さびしさは水底までにとほりけり夕日のすめる秋の砂川

野雁は『野雁集』という自詠歌集を生涯に七冊編んでいたようだが、第一『野雁集』に該当すると考えられる『旅路の草の葉』（岐阜中津川市、市岡家蔵　嘉永三年（一八五〇）成）には、右掲の作は見えず、第二『野雁集』と思われる常葉本『野雁集』（嘉永五年（一八五二）成）に「秋夕」の題をもつ五首の中に収められている。さらに、天理本『野雁集』（何番目の『野雁集』かは不明）にも「秋の夕のこころをよめる」という題下の五首中の一首として収載されている。天理本『野雁集』（元治元年（一八六四）成）は、時に五十歳の野雁が人生の区切りとして、それまでの作の中から精撰した自詠歌の撰集である。従って、右掲の歌は野雁自身にとって一応は自信のある作であったと推定される。

上述のような入集状況によれば、この歌は嘉永三年から五年の間に詠まれたもので、野雁三十六歳から三十八歳に当る。岐阜中津川を発って帰府の途に就いた野雁は、駿河の岩淵（現、静岡県庵原郡富士川町）に滞留した。この歌は、その間の各地の寄遇先で催された野雁を中心とする歌会で作られた題詠であろうと思われる。

一首の眼目となる「さびしさは」を第一句に置いて第二・三句にさびしさの中味を述べ、下二句にその感懐をもたらした景を詠んでいくという手法は古来よく使われている。「さびしさは」を起句とする歌に限定しても、『国歌大観』（勅撰集、索引）によれば、

さびしさはその色としもなかりけり槇立つ山の秋の夕暮（新古今集、寂蓮）

という三夕の歌の一首をはじめとして二十首近くになる。いわば題詠の常套であり、野雁もそれを使った。下二句の「夕日のすめる秋の砂川」においては、「夕日にすめる」ではなく「夕日のすめる」となっている。これは「すめる」をその上下に働かせたもので、「夕日が澄んでいる」と「澄んだ秋の砂川」との意に用いていると思われる。これも題詠歌らしい技巧である。本居大平・村田春門らに学んだ野雁にとっては手慣れた手法の歌で、この歌は、あった。その点に限れば、佳作とは先ず言えそうにない。彼の和歌の特徴の一つである記紀歌謡・万葉風の調べもこの歌にはない。ただ、堂上派の範とする優美・典雅に徹することを野雁はしばしば避けたのだが、この歌にも「砂川」という平俗をねらった表現にそれが見られる。だが、これは特記すべきほどのことではない。

さびしさは水底までにとほりけり

澄み切って露わな水底まで、作者の全躯を領する寂寥が浸み通り沈んでいく。作者自身が水底に吸い込まれていく思いでもあろう。題詠的な見立てに通じるところのある句ではあるのだが、題詠の閾を超えている。題詠歌に作者の実人生を重ね合わせて見るのは誤りかもしれない。が、江戸に出てからは不如意の連続であった野雁の、これが三十歳台半ばの人間のものとは信じられないような、己れの人生の果てまで見てとってしまったかのような胸中を題詠の背後に感じてしまうのである。

太宰治の『斜陽』の中に次のような一文がある。

幸福感といふものは、悲哀の川の底に沈んで、幽かに光つてゐる砂金のやうなものではなからうか。悲しみの限りを通り過ぎて、不思議な薄明りの気持ち、あれが幸福感といふものならば云々

野雁が沈んでいった砂川の砂は果して砂金に変じていったであろうか。そこまで考えてみたことはないが、存外、然りであったようにも思う。